

きたし、近医受診。狭心症および28年前まで塩化ビニール曝露の既往認める。CTで、肝外側区に径70mmの腫瘍および肝表面に腹水を認めた。腹水穿刺で、血性腹水認め、肝腫瘍、肝腫瘍破裂の疑いで、当院紹介。緊急肝動脈血管造影および塞栓術を施行。再出血の危険あるため、待機的肝切除術を施行。組織は、血管肉腫であった。術後経過順調で退院。

生活歴として、塩化ビニールを扱った工場に勤務しており、この化学発癌物質である、塩化ビニールが肉腫発生の成因と考えられた。また、狭心症の既往もあり、抗血小板機能抑制剤使用されているため、これが病態の増悪因子となったものと考えられる。本症例はまれで、診断が困難、かつ予後不良な疾患である。

今回を我々は、肝破裂をきたしていたが、緊急肝動脈血管造影および肝動脈塞栓術により救命し得た一例を経験したので報告する。

## 6 若年者の胃静脈瘤を契機に発見された肝外門脈閉塞症の一例

村田 陽稔・野見山陽子・渡辺 卓也  
良田 裕平・川端 英博

新潟労災病院消化器内科

## 7 硬化型肝細胞癌の初期画像所見を確認しえた一例

上村 顕也・小林 正明・森 茂紀  
柳沢 善計・小杉 伸一\*・大橋 泰博\*  
佐藤 攻\*・野本 実\*\*  
加村 毅\*\*\*

信楽園病院消化器内科  
同 外科\*  
新潟大学第三内科\*\*  
同 放射線科\*\*\*

症例はHBVキャリアーの50歳男性。平成12年の検診の腹部USで肝S5に1cmの腫瘍性病変を指摘され当院にてUS、CT施行、血管腫疑いとして経過観察されていた。13年の検診のUSで同

腫瘍が6cmに増大していたため当科紹介された。腫瘍はUSで辺縁がlow内部が比較的high echoicに描出され、dynamic CTでは早期相で辺縁が濃染、後期相にかけて中心へ向かい濃染されていく所見を呈した。肝外悪性病変は認められず画像所見から胆管細胞癌を疑い肝右葉切除術を施行。病理学的検索にて硬化型肝細胞癌と診断された。硬化型肝細胞癌は稀な疾患で、初期画像が確認でき、示唆に富むと考え報告する。

## 8 画像学的に診断し得なかった肝腫瘍の一例

藤村 健夫・佐藤 明人・松田 康伸  
小林 真・和栗 暢生・須田 剛士  
高橋 達・野本 実・青柳 豊  
朝倉 均・山本 哲史\*・加村 毅\*

新潟大学第三内科  
同 放射線科\*

症例は68歳、C型肝硬変の女性。腹部超音波検査で肝S3に11mmの高エコーを呈する結節を認めた。CTではわずかに早期濃染し、門脈相で低造影域となったが、MRI T1WIで高信号、T2WIで等信号であり、SPIO MRIで取り込み低下が認められず、確定診断には至らなかった。腹部血管造影、CTA、CTAPを行ったところ、明らかな腫瘍血管は認めなかったが、CTA第一相で強い濃染像を認め、CTAPでは明らかな低造影域して認識された。最終的には腫瘍生検で高分化型肝細胞癌と診断した。早期肝細胞癌の中には腫瘍内血流の性状変化が著明でない場合があり、本症例のように多様な画像所見を呈することがあることを念頭に置き診断することが必要と思われた。

## 9 動脈血流低下巣を内包した結節内結節型肝細胞癌の一例

坪井 康紀・杉谷 想一・長谷川勝彦  
曾我 憲二・柴崎 浩一

日本歯科大学新潟歯学部内科

症例は73才、女性。H3年より、C型慢性肝炎にて経過観察中であった。H12年4月、腹部エコー